「宇宙時代における科学と虚構」

―空飛ぶ円盤言説と戦後科学―

中村朱理

「人類は、もはや地球人ではなくて、宇宙人になるのである。宇宙文明に参加するのである」

1957 年 10 月 8 日の『朝日新聞』にて、文芸評論家の荒正人はそう発言する。

ソ連の人工衛星スプートニクの打ち上げが成功した 1957 年を周辺に、世界は空前の宇宙ブームにあった。日本でも、科学雑誌をはじめとする各種メディアにて、宇宙旅行や月面開拓、地球外生命体の存在についての話題について、科学的展望と空想的観点の双方からの議論がなされた。なかでも、「空飛ぶ円盤」に魅せられた宇宙愛好家たちは円盤や宇宙人を一目見たいと観測に夢中になり、自身らで研究団体を立ち上げることとなる。

当時発足したいち円盤研究団体である「宇宙友好協会（CBA）」は、1957 年 8 月、航空ジャーナリストとしても活動していた松村雄亮を中心に発足し、宇宙人とのコンタクトを肯定的、希望的に捉え、宇宙人との友好関係の構築を夢見るものたちで構成された団体だった。彼らが 1960 年前後に活動の軸として展開していた「古代宇宙人来訪説」は、「古代に円盤人が地球を訪れ、高度文明を築いた。ピラミッドやナスカの地上絵など、設歴のわからない建築物がその痕跡だ」という主張であり、科学を正当な知として扱う科学者からは、当然排斥の対象として退けられた。

しかし、科学的な観点からみたときに棄却されてしまうようなこうした疑似科学言説が、表現の場――とりわけ文学の世界において、何らかの有効性を発揮していた可能性について考えてみることはできないか。

本発表は、「古代宇宙人来訪説」という疑似科学言説を、単なる誤謬として切り捨てるのではなく、人文知の領域における思想潮流に何かしらの影響を与えたものとして検討することに目的をおく。

同時期の「空飛ぶ円盤」言説に着目すると、宇宙に関する期待や展望は、しばしば「古代」の謎や超古代文明がもつロマンと結びつけて語られていたことがわかる。黒沼健『秘境物語』（1957・4）を筆頭に、円盤人（宇宙人）という未知の存在が持つ未知の力への期待は、次第に未だ明らかにならない古代文明が孕む謎や、古代人に対する憧憬の念に重ねられていく。つまり、「宇宙友好協会」が示していた「古代宇宙人来訪説」という疑似科学言説は、思いつきの迷信という枠組みを超え、人工衛星の打ち上げに象徴される宇宙への憧憬と、失われた超古代文明への希求という、一見相反するベクトルの時代思潮が交差する結び目として現れた可能性を指摘できるのではないか。

文学の世界において、こうした時代的感覚を受け止めた例のひとつとして、安部公房の名をあげたい。彼が 1957 年 11 月に発表した『鉛の卵』は、コールドスリープによって 80 万年後の未来で目覚めた男が、そこで生きるものたちに翻弄されるという、ある種のタイムスリップものである。「古代人」と「未来人」が登場する本作の結末において、人類の進化した姿として語られていた「未来人」は転倒し、進化し得なかった「古代人」の姿をした者たちこそが、真に「いま」を生きる者であったということが明らかになる。

1950 年代の宇宙ブームの中で、大衆や愛好家たちが作りだした言説空間は、科学的知見とどのように対峙していたのか、またそれらと文学の連関性を分析する以上の研究は、本発表においては今後の展望を残す形になるが、戦後日本の科学観、大衆文化の変遷を立体的に理解する手がかりとなるだろう。